

9

258

本邦ノ森林及ヒ林學

9
258

本邦ノ森林及ヒ林學

目次

緒言

第一章

森林ノ効用

直接ノ効用

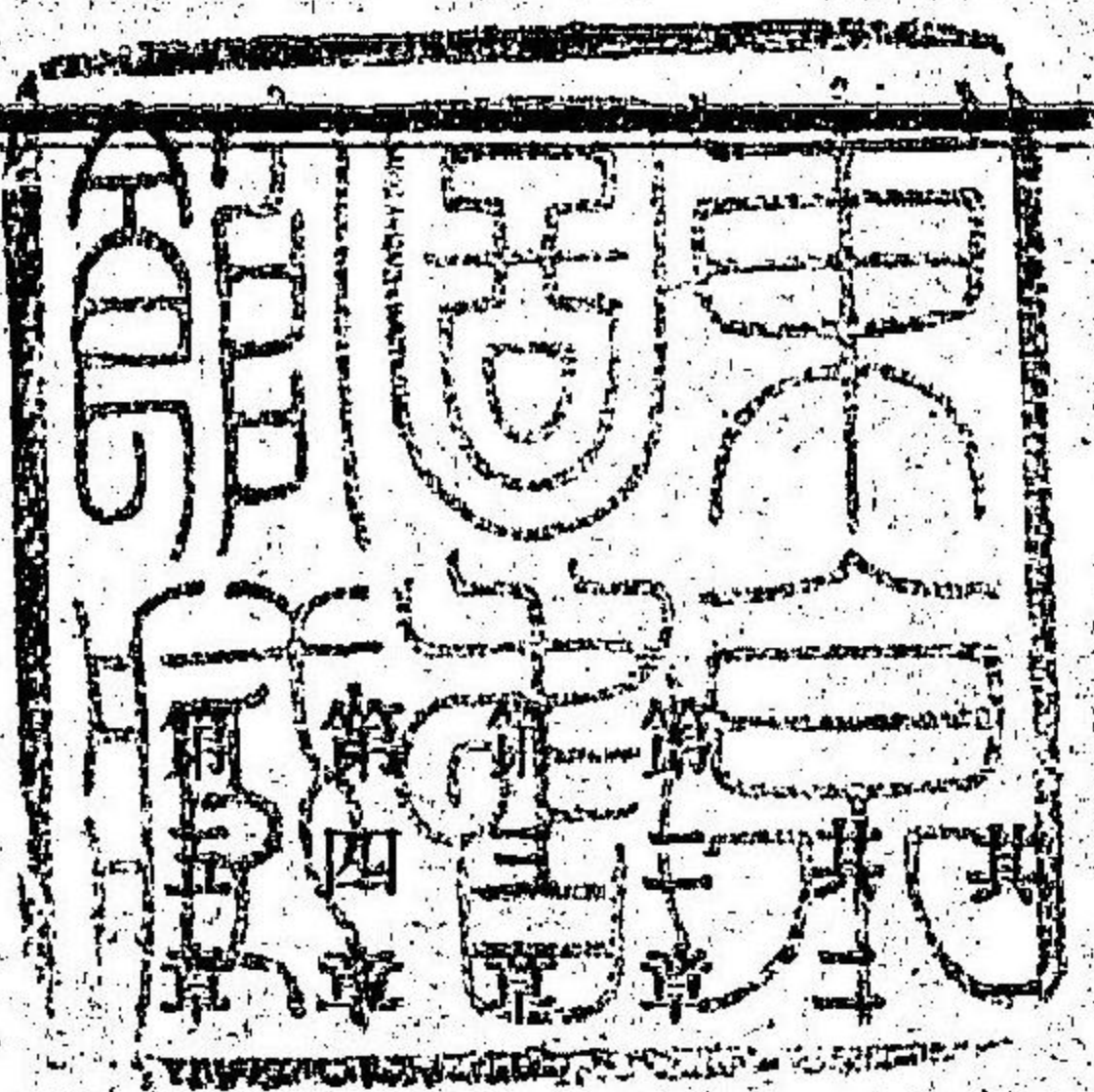
間接ノ効用

森林ノ配置

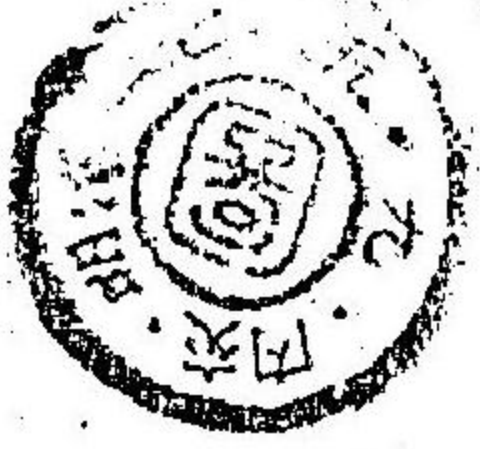
森林ノ歴史現況及將來ノ事業

林學者ノ需用

森林教育



本邦ノ森林及ヒ林學



志賀泰山述

科學東漸シテヨリ既ニ二十餘年醫術法律理工藝ノ學長足ノ進歩ヲナシ有爲ノ士
 彬々輩出シテ之ヲ研究ニ志ラス今ヤ朝トナク野トナク樞要ノ地位ヲ占メ其手腕ヲ
 揮ヒ其技能ヲ顯ヤ
 歐米ニ對スルモ甚レキ愧色ナキニ至レリ故ニ此等科學ニ對ス
 ル觀念モ社會ニ普及シ今日ニ至リテハ復之カ効用ヲ説クノ要ナキカ如シ然ル
 ニ我林學ヲ顧レハ其情態果シテ如何シヤ社會ノ經濟ニ通セス學術ノ眞理ヲ解セザ
 ル世人ハ措テ論セサルモ世ノ學者ヲ以テ自ラ任スルモノ且ツ林學ノ一個ノ高尚緊
 要ナル學術タルヲ認識セサルモノアリ學者已ニ然リ後進青年ノ輩之ヲ識リ之ヲ學
 ブモノ少ナキ素ヨリ論ヲ待タサルナリ林學ハ應用學タルカ故ニ然ルカ醫學工學ハ

亦應用ノ學ナリ林學ハ高深ナラサルカ爲メカ否林學ハ決シテ高等ノ科學殊ニ理化
數學ノ深理ヲ知ラサレバ學ブヘカラサルナリ林學ハ本邦ニ必要ナラサルカ爲メカ
否本邦今日ニ於テ林業ノ振興ヲ要スルハ世人ノ皆認知スル所ニシテ社會ノ實勢ハ
林學ノ發達ヲ促カシテ已マサルナリ林學者ノ社會ニ於テ高等ノ地位ヲ占ムルヲ得
サル爲メカ否林學者ハ今日並ニ將來ノ情勢ニ在リテ必ス他ノ專門學者ト提携以テ
同一ノ地位ヲ保ツヲ得ヘキナリ然ラハ則チ其因果レテ何ニアルヤ蓋シ林學ノ本邦
ニ起ルヤ日猶淺ク森林教育未タ完カラス從テ其効果著シカラサルノ致ス所ナリ惟
フニ何レノ學術ト事業トヲ問ハズ其起ルノ初ニ當リテハ必スヤ千艱ヲ排シ萬苦ヲ
重キ漸ク發達進步ノ域ニ至ルヘキノミ然リト雖モ衆口金ヲ鑠シ紫朱ヲ奪フ曲論僻
說或ハ斯學ノ前途ヲ阻礙スルナキヲ保セシ余輩斯學ノ先導者トナリ斯學ノ保護者
トナリ斯學ト死生ヲ俱ニセントスル者豈一言以テ辯スル所ナクシテ可ナランヤ庶
幾クハ讀者此小篇ニヨリテ以テ本邦林業ノ性質及ヒ科學トシテ林學ノ價值并ニ本
邦ニ於ケル林學ノ必要ニ就キ其梗概ヲ知ルヲ得シカ

第一章 森林ノ効用

仰テ天ヲ望メハ日月星辰際リ俯レテ地ヲ視レハ山川草木布ク吾人ハ即天ノ文地ノ
章燦然タル此兩間ニ棲息スルナリ然リ而レテ地球上若シ草木ナキハ果シテ如何
ナル景況ニアルヤ想フニ荒涼タル一大土地ニ均シク吾人ハ得テ生活スル能ハサラ
シ詩人謂ハスヤ若シ國土ニシテ森林ナキハ亞非利加ノ砂漠ノ如クナラント實ニ
然リ森林ハ地ノ章ヲナス所ノ最美ナル彩色ナリ人類棲息ノ最善ナル住家ナリ人類
生活ノ最大ナル資本ナリ今其効用ヲ大別セバ直接ト間接トノ二アリ請フ左ニ之ヲ
述ヘシ

其一 森林直接ノ効用

木材ヲ初メ他ノ林產物ヲ出タレ人世必需ノ用ニ充ツル之ヲ森林直接ノ効用ト云フ
輓近建築用トシテ鐵若クハ石ヲ利用シ薪炭用トシテ石炭ヲ利用スル一日一日ニ増
加シ恰モ木材ノ需用ハ漸次減少スヘキカ如キ觀ヲ呈スト雖モ其真相ニ至リテハ却
テ反對ノ結果ヲ顯ハシ木材ノ需用ハ人口ノ繁殖ト共ニ増大スルハ爭フヘカラサル
ノ事實トナレリ但薪炭林減少シテ用材林トナルノ傾向アルノミ然レモ今日歐洲ノ
大都會ニナリテモ薪炭ノ需用ハ尙頗ル巨額ニシテ平均一人ニ付一年〇五乃至〇六

六立方メートル層積ノ燃材ヲ使用セリ況ンヤ本邦ノ如キハ木材ヲ使用スルヲ歐洲ノ比ニアラス家屋橋梁ノ建築船艦舟車ノ製造ヨリ日用器具ノ製作兼テ薪炭ノ消費ニ至ルマテ其用勝テ數フヘカラス余カ調査ニ據レハ本邦ニ於テ年々使用シ又ハ消費スル材積ハ大凡左ノ如シ但レ一尺メートルハ長十二尺斷面一尺平方ヲ有スル角柱ノ實積即チ十二立方尺ニシテ本邦測樹ノ單位ナリ

木材需用種別	需用	高	備	林	面	積
用材		四〇、〇〇〇、〇〇〇				二、五〇〇、〇〇〇
薪炭材		一三〇、〇〇〇、〇〇〇				八、九〇〇、〇〇〇
計		一七〇、〇〇〇、〇〇〇				一一、四〇〇、〇〇〇

前表ノ結果ニヨレハ本邦ニアリテハ單ニ需用材ノミニテモ凡千四百四十万町歩ノ法正ノ森林ヲ常備セサルヘカラサルノ割合トナル又一步ヲ進メテ木材ノ缺乏セル支那朝鮮ニ輸出セント欲セハ此面積ノミニテハ得テ其目的ヲ達スル能ハサルヘレ以上述ヘタル如キ需用ヲ充メス爲メニ經營スル所ノ森林ヲ施業林ト稱ス施業林ハ

即森林直接ノ効用ヲ顯ハスノ目的ヲ有スルモノナリ夫レ森林ハ地方微弱ニシテ他ニ利用スルヲ得サルノ土地或ハ利用スルモ收利少ナキ土地ニ於ケルモ猶完全ニ生育スルヲ得ルカ故ニ林業ハ山村僻地ニ在リテ費用及ヒ勞力ヲ用フル少ナクシテ却テ他ノ農業ニ比スレハ其効果多キヲ少カラス是レ一ハ樹木ハ農耕植物ノ如ク地味氣候ニ制限セラル、一少ナク一ハ管理及ヒ貢租ノ費用少ナキカ爲ナリ今試ミニ吉野森林東京近傍林及茨城縣地方ニ於ケル森林ノ收益ヲ比較セントス

吉野森林ニアリテハ輪伐期ヲ百三十年トシ連年作業ヲ施ストキハ年々一町歩ヨリ二十九圓九十二錢ノ純收入ヲ得ラル、モ該地ノ農業ハ年々一町歩僅ニ三圓九十錢ノ純收入ニシテ之ヲ比較スレハ林業ノ純收入ハ農業ノ七倍半餘ナリ其資本ニ對スル割合ハ林業ハ九分八厘ニシテ農業ハ二分一厘ニ相當セリ次ニ東京市ニ近キ四谷丸太ノ産地ニ就キ調査スルニ伐期四十五年ニシテ連年作業ヲ施セハ年々純收入三十九圓七十九錢餘ニ當ルモ農業ハ七十四錢一厘ノ支出超過セリ又茨城縣地方ノ松林ハ伐期三十六年ニシテ連年作業ヲ施セハ年々百圓以上ノ純收入ヲ得ルモ農業ヲ

施セハ常ニ收支相償ハサルモノ、如レ(農業ノ利益此ノ如ク其レ少キハ一ハ農耕其益ヲ増スニ至ラシ)以テ見ルヘレ林業ハ永遠ノ事業ニレテ農業ノ如ク眼前ニ利ヲ見ル能ハサルモ長年月ノ間ニハ却テ農業ヨリモ利益多キヲ是レ輓近大地主カ林業ニ資本ヲ注入セントスルノ傾向アル所以ニレテ國家カ森林ヲ經營スルハ最モ其當ヲ得ルモノナルヲ知ルニ足ルヘレ

其二 森林間接ノ効用

森林間接ノ効用ハ亦甚大ナリ氣候之ニ因テ以テ順ニ國土之ニ因テ以テ安レ今間接ノ効用ヲ顯ハス森林ノ種類ヲ列記スレハ左ノ如シ

- 一、衛生林
- 二、防風林
- 三、支雪林
- 四、支石及停氷林
- 五、土砂扞止林
- 六、護岸林
- 七、水防林
- 八、飛砂防止林
- 九、水源涵養林
- 十、堤防林
- 十一、防潮林
- 十二、海標林
- 十三、魚附林
- 十四、風致林

以上ノ目的ニ供スル森林ヲ保護林ト稱ス保護林ニアリテハ唯其枯木ヲ伐採スルニ

止ムルアリ或ハ擇伐作業ヲ施スアリ要スルニ土地ノ狀況ニヨリテ取扱法ヲ異ニスヘント雖モ何レノ場合ヲ問ハス利用ヲ制限シ多クハ皆伐作業ヲナスヲ禁スルモノトス

山高クテ峻ニ河短クテ急ナル本邦ノ如キ地勢ニアリテハ森林ニヨリテ以テ其安全ヲ保ツモノ實ニ歐洲ニ於ケルカ如キ比ニアラス從テ間接効用ノ偉大ナル亦歐洲ノ比ニアラサルヲ知ル可レ

第二章 森林ノ配置

森林ヲ仕立ツヘキ土地ニ二種アリ一ヲ絶對的林地ト云ヒ一ヲ比對的林地ト云フ絶對的林地トハ森林ニアラサレハ他ニ有益ナル利用ノ途ナキ土地ヲ云ヒ比對的林地トハ農業ニ適スト雖モ運搬交通ノ有様又ハ木材需用ノ關係ヨリ便宜上森林ニ仕立タル土地ヲ云フ本邦ニアリテハ少クモ全國面積ノ四十%ハ絶對的林地ナリ換言スレハ此四十%ノ地ハ森林ヲ措テ他ニ利用ノ途ナキナリ之ニ猶便宜上森林ニ仕立ツヘキ土地即チ比對的林地ヲ合スレハ少クモ四十五%ハ森林ヲ以テ覆ハル、ナラン此ノ如ク本邦ハ森林地多キカ故ニ須ク森林國トシテ列國ノ間ニ立タサルヘカラス

此四十五%ノ土地ニ充分森林ヲ仕立ツルモ其產物ノ供給甚シク我國ノ需用ニ過ク
 ルコトナカルヘシ若シ供給多キニ過クレハ本邦ノ國產トシテ亞細亞大陸ニ輸出ス
 ヘキノミ豈亦愉快ナラスヤ
 今試ニ本邦現在ノ耕地及ヒ森林原野ノ割合并ニ人口トノ比ヲ左ニ示サン

	森	林	原	野	耕	地
御料	一、三〇〇、〇〇〇	二、三〇〇、〇〇〇				
官有	一、一七〇、〇〇〇	五、九〇〇、〇〇〇				
民有	七、三〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇				
計	九、七〇〇、〇〇〇	九、三〇〇、〇〇〇				
比	四、一	一、九				
人口一人ニ付	〇、五	〇、〇二				
全國面	五五%	二五%				一六%

右ノ如ク森林地ハ大部分ヲ占領セリト雖モ樹木ヲ以テ覆ハル、所ハ僅ニ其三十%

ニ過キス其殘餘七十%ハ皆嶺山秃峯ニシテ甚シキニ至テハ一草一木タモ尙且生セ
 サル所アリ而シテ其配置甚々不平均ニシテ一地方ニアリテハ日用薪炭ニ缺乏ヲ告
 グルモ他ノ地方ニ在リテハ丈園ノ大材モ殆ト一錢ノ價値ナキアリ

第三章 森林ノ歴史現況及ヒ將來ノ事業

其一 歴史

我國封建ノ世ニアリテハ列藩東西ニ割據シ互ニ相睨スルヲ恰モ戰國ノ狀ノ如シ
 法律ノ寬嚴政綱ノ張弛農業ノ盛衰工商ノ興廢各々異ナリ文學ノ隆替ヤ技術ノ巧拙
 ヤ又甚シキ懸隔アリテ之ヲ今日ノ狀況ト比較シ來レハ眞ニ別天地異乾坤殆ト信ス
 ヘカラザルモノ、如クナリシナリ而シテ森林制度ノ如キ又此種ノ狀態ヲ免ル能ハ
 スンテ各藩其法ヲ異ニシ寬嚴其宜キヲ得ス之ヲ今日ヨリ見レハ非難スヘキ點少カ
 ラザリント雖モ其森林ヲ愛護シ濫伐ヲ防キ深謀遠慮以テ思フ後代ニ貽シタルノ一
 事ニ至リテハ大ニ嘆賞スヘキモノアルナリ現時ノ著名森林ハ皆舊藩時代ノ遺物ス
 ルニ外ナラサルヲ知ラハ往時美木ノ地ニ滿チタルヲ追想スルニ難カラサルヘシ今
 舊藩ノ森林ニ對シテ施爲シタル事項ヲ略記スレハ左ノ如シ

一百姓町人ハ土地ニ對シ唯使用及年期賣買ノ權ヲ有スルノミ藩主又ハ幕府ハ土地ニ對シ取上ヲナスノ權ヲ有シタリ此作用ハ特ニ山林原野ニ向テ甚レカリナリ

二藩ノ山林ニハ留山、建山、控山、見繼山、拜領山、郷山村山ノ階級ヲ立テ其輕重ヲ分チ人民ノ擅ニ留山、建山等ニ入ルヲ嚴禁シタリ

三山奉行、山目付、山役人、山方役、横目、山廻、山守、山番等ノ山林官ヲ置キ之ヲ優待シテ山林行政ヲ施セリ

四御用水又ハ御留水ト稱スルモノヲ定メ嚴重ニ之ヲ保護セリ例ヘハ水曾ノ五木、紀州ノ六木、阿州ノ七木、秋田ノ青木、嶺本ノ三木、平戸ノ三木等ノ如シ

五嚴酷ナル森林法律否寧口罰則ヲ設ケテ犯罪人ヲ處分シタリ今各藩ニ行ハレタル懲罰ノ名稱ヲ舉ケレハ叱リ、科料、郷預ケ、村預ケ、引廻シ、入牢、押込メ、閉門、缺所、所換ヘ、手錠、叩キ、入レ墨、燒鑊、遠島、死刑等寬嚴輕重ノ別アリシナリ

然ルニ明治四年七月廢藩置縣ノ令一タヒ出ツルヤ士ハ舊慣ヲ改メ民ハ新奇ヲ遊ヒ排舊好新ノ勢力猛進シテ百歲ノ制度頓ニ革マルト同時ニ舊來ノ林制大ニ弛ミ恰モ

森林ノ開闢ヲ撤シテ之ヲ放開セシカ如ク其弊ヤ盜伐墮ヲ接シ濫採運リニ起リ遂ニ底止スル所ヲ知ラサリシナリ殊ニ家祿奉還ノ事起ルヤ士族授産ノ道ヲ與ヘンカ爲ニ之カ資本トシテ森林ヲ給セシニ生レテ未タ貸殖ノ道ヲ知ラサル士族輩何ソ久シク之ヲ保有スルヲ得ヘキ水ヲ鬻キテ貨トナシ地ヲ賣リテ財トナシ忽チ之ヲ雲散霧消スルニ至レリ又一方ニ於テハ政府ハ稅源ヲ增加センカ爲メニ漫リニ土地ノ開拓ヲ獎勵セシテ以テ重子テ森林ニ甚シキ厄運ヲ被ラシメタリ其狀恰モ現世紀ノ始ニ營リアタムスミス學派ノ跋扈スルヤ歐洲各國ニ於テ盛ニ國有林ヲ賣却シ森林ヲシテ耕地ニ變セシメタルト髣髴タリシナリ是レ實ニ本邦森林荒廢ノ第一因ナリトス

之ヲ聞ク今日我帝都ノ美觀タル上野公園ノ如キモ當時之ヲ拂下クルノ議アリシカ某藩主ノ沮ム所トナリテ纔ニ中止シタリト又歐米人ノ碧眼ヲ驚カス日光街道ノ杉樹ノ如キモ賣却セラレントセシカ某公使ノ勸告ニヨリテ幸ニ斧鉞ヲ免レタリト其他全國ノ大森林ヲ舉ケテ之ヲ賣却シ以テ國庫ノ補助トナサントシタルヲアリト之ニ由テ是ヲ觀レハ還祿士族ニ山林ノ拂下又ハ開墾獎勵ヲナセシ如キモ當時ニ在テハ無二ノ良策トシテ賞用セラレント知ルベシ而シテ識者夙ニ禍害ノ來ルヘキヲ憂

七當局者又漸ク之ヲ察シ後年ニ至リ森林愛惜ノ念ヲ起シ布達ヲ頒テ命令ヲ布キタ
 リト雖也事既ニ晚ク精力ノ及フ所容易ニ止息スヘクモアラヌ森林ノ荒廢ハ日一日
 ヲリ増加セリ繼テ明治八年地租改正ノ舉アルヤ官有ノ土地ト雖也從來ノ慣行ニヨ
 リ使用セシモノハ民有地トナセシカ故ニ此時ニ於テ從來國家ニ保護セラレシ森林
 モ一朝民有トナリシモノ少カラス而レテ其民有トナリシモノハ率テ濫伐セラレタ
 リ加之之ニ伴フテ官民ノ境界亂雜ヲ來セシカ故ニ盜伐濫採ノ害之ニ附隨スルヲ免
 レサリキ之ヲ森林荒廢ノ第二因トス
 降テ明治十八年ニ至リ大藏省ハ府縣ニ向テ地押調査ノ一ヲ訓令シ實地ト臺帳ト相
 合一セシムル一ヲ力メタリ此時ニ當テヤ社會ノ狀態一變レテ土地ヲ重スル一明治
 初年ノ比ニアラス寸地尺壤モ猶且ツ之ヲ棄ルヲ吝ムニ至レルヲ以テ此訓令ヲ好機
 トシテ官林地ヲ侵蝕セシモノ少カラス從テ森林ノ伐木セラレタルモノ甚々多ク之
 ヲ森林荒廢ノ第三因トス
 然リト雖也我森林ノ荒廢ハ他ニ一大遠因ナクンハアラヌ何ソヤ曰ク本邦ニアリテ
 ハ古來農業ノ肥料ハ主トシテ山林ニ取ルノ一事ナリトス而レテ之ヲ取ルノ唯一ナ

ル手段ハ火ヲ放ツニアリテ恰モ古代希臘及ヒ小亞細亞ニ於テ牧羊ノ目的ヲ以テ好
 シテ山林ニ火ヲ放チタルト一般ナリ識者既ニ之ヲ怪マス烏ゾ之ヲ盡爾タル細民ニ
 資ムヘケンヤ夫レ肥料ヲ山林ニ取ル既ニ不可ナリ之ニ放火ヲナスニ於テハ尙不可
 ノ甚シキモノニアラスヤ抑モ山林ニ火ヲ放テハ單一ニ草ノミヲ生シテ更ニ樹木ヲ
 生セズ採草ノ爲ニハ一時便益ナルヘキモ之カ爲メニ土壤ノ乾燥ト地力ノ衰弱トヲ
 誘致シ容易ニ回復スル一ナク甚シキニ至リテハ土壤滑下シ山骨露出シ遂ニ草類ヲ
 毛生セサルニ至リテ止ム加之放火ノ餘燼ハ延テ隣所ニ移リ鬱葱タル美林モ一朝灰
 燼ニ歸スル一古來少シトセス就中近年ニ至リ殊ニ甚シキヲ見ル之ヲ森林荒廢ノ第
 四因否寧ロ唯一ノ最大遠因ナリトス
 本邦ノ森林荒廢ハ以上ノ四大原因ヨリ生セリ然レモ政府モ亦其意ヲ林政ニ注カサ
 リレニアラス廢藩後ニアリテハ山林ノ事務ハ民部省內務省又ハ大藏省中ノ一課若
 シハ一掛トナシ後一局トナシ數回ノ變遷ヲ經テ明治十二年五月內務省中ニ山林局
 ヲ置キ次テ全國ニ山林局出張所ヲ設テ明治十四年七月農商務省ノ創立セラル、
 ヤ乃チ山林局ハ此省ニ移リ山林局出張所ハ山林事務所ト改稱セラレタリ十九年五

月ニ至リ始テ大小林區署ノ制ヲ定メラレ廿二年九月ニ至リ全國ノ官林舉テ其直轄
 下ナレリ本邦ニ於テ進歩的ノ森林行政ヲ施爲セシハ實ニ此時ヲ以テ嚆矢トス即チ
 廿二年以前ニアリテハ施政ノ方針一定セザリシニ此時ニ至リ始テ確一ニスルヲ得
 タリレナリ今其主要ナルモノヲ舉クレハ境界調査ノ一事トス是レ林業ヲナスニハ
 其根本タル地積ヲ明カニセサルベカラサルノ主旨ニ出テタルナリ而レテ其費用ハ
 八十萬圓ニシテ明治二十二年ヨリ向三十ヶ年ヲ期シ成功スルノ目的ヲ以テ實測ニ
 着手シ爾來間斷ナク此事業ヲ繼續セリ又一方ニハ地方廳直轄ノ官有地中ニモ將來
 國有林トナスヘキモノアリ又官林中ニモ將來廢棄スヘキモノアルヲ以テ之カ存廢
 區分ヲ立テ以テ森林地ヲ整理セサルベカラス之ヲ實況調査ト稱シテ數年來施行セ
 レカ今ヤ全國調査濟トナリテ早晚一大處分ノ實行ヲ見ルアラントス此處分ノ結果
 ニヨリ存スヘキハ存シ廢スヘキハ廢シ其存置スヘキモノハ可成速ニ測量ヲ施シ以
 テ境界ノ判明ヲ期スルハ是レ即チ明治廿二年以來ノ大方針ニシテ將來益々此目的
 ヲ達スルニカムヘキナリ

其二 現況

既ニ第二章ニ述ヘタル如ク本邦森林ノ面積ハ全國面積ノ約二分ノ一ニ居レリト雖
 卽今日樹木ヲ以テ覆ハルモノハ僅ニ其ノ三十%ニ過キスレテ漸ク都市ニ遠カリ
 市町村落ノ間ニ點在スル社寺上地林ノ僅ニ往時美木ノ地ニ充滿セルヲ追懷セシム
 ルアルノミ今ヤ夏林美樹ノ地變シテ砂礫不毛ノ野トナリシモノ比々皆然リ村翁野
 老往時森林ノ美ヲ説キ山野荒廢以後水源乾涸田水ノ給セサルヲ嘆スルモノ多シ加
 之樟腦ノ輸出盛ニシテ樟樹殆ト其跡ヲ絶チ憐寸業興リテヨリ「サハグル」ミ「ヤマナラ
 シ」殆ト盡キ火藥製造急ニシテ「ヤナギ」ハ「ン」ノキ「巳」ニ無カラントス製紙一二ノ工場起
 リテ材料ノ給スルモノナキニ狼狽セリ此等區々ノ用材ト雖モ今ヤ本州便利ノ地其
 材ニ乏シク近來其供給ヲ北海道ニ仰ケリ今日民林共有林ノ如キハ吉野熊野二三ノ
 地方ヲ除ケハ樹木漸ク絶ヘテ村市燃料ノ資源ハ往々之ヲ官林ニ求メ盜伐愈盛ニシ
 テ保護愈難ク訴事常ニ紛々タリ而レテ材價日ニ上リ森林日ニ減シ積年濫伐ノ惡果
 今ヤ乃チ顯ハレ土砂崩潰シ川底隆起シテ數日ノ連雨河水忽チ奔漲シ家ヲ流シ人ヲ
 殺シ其懷其慘豈ニ之ヲ言フニ忍ヒシヤ而シテ世人徒ニ水害救助ニ驚々シ護岸修堤
 ニ驟々シテ其禍源遠ク森林ノ荒廢ニ在ルヲ知ラサルナリ其本已ニ亂ル未流ノ石堤

鐵岸何ノ効力是アラン且又海濱河岸森林影ヲ收メテ水明沙白漁獵ノ大ニ減シタルハ漁父ノ嘆シテ訴フル所ニシテ不毛ノ砂原森林アリテヨリ麥穀ノ始メテ長スルハ老農ノ樂ミテ語ル所ナリ

又熟々森林行政ノ現状ヲ見ルニ全國二十大林區署ヲ設ケ三百八十四小林區署ヲ置キ(御料林ニアリテハ二三ノ支廳ヲ設ケ數多ノ出張所ヲ置ク)以テ森林經營ノ務ニ當ルト雖其經費ハ僅ニ日常ノ事務ヲ處辨スルニ充ツルニ過キス從テ吏員ノ如キ常ニ不足ヲ告ケ一人ニシテ森林數萬町歩ノ保護ニ當ルモノ少カラズ故ニ官林ノ巡視徧チカラスレテ風賊出沒シ之ヲ東ニ捕フレバ西ニ失レ之ヲ朝ニ懲セハ夕ニ犯ス等恰モ蒼蠅ヲ追フニ異ナラス又造林費ノ如キモ一ケ年僅々十一二萬圓ニシテ年々伐採跡地ニ新植ヲナスニ過キス絶大ノ無立木地ハ依然トシテ舊觀ヲ改メス無數ノ天然林ハ靜然トシテ深山幽谷ニ充テリ世人漫リニ本邦ノ森林收入ハ少シトイフモ其ノ少ナキ所以ヲ知ラス資ヲ投シカヲ致シバ今日ヨリ數十倍ノ收入ニ至ラレムルコト易キタルノミ然ラハ將來ニ向テ一大英斷ヲ施シ之カ改良ノ策ヲ講スルハ實ニ本邦目下ノ最大急務ナリト云フヘシ

其三 將來ノ事業

第一無立木地ノ利用 本邦ニ於テ無立木地ノ多キハ全森林地ノ七十%ニ當レルヲ以テモ知ルヘシ人若シ山陽南海東海ノ諸道ヲ歴觀セハ秃峯巖山連綿斷ヘサルヲ見シ此等大面積ノ土地ハ皆絶對的林地ニシテ之ヲ放置スレハ實ニ國益ヲ増サ、ルノミナラス國土ノ保安ヲ害スルモノナリ而シテ此等ノ連山始ヨリ此ノ如クナリシニハアラスシテ既ニ前段ニ述ヘタル如キ種々ノ原因ニヨリ遂ニ森林ノ廢滅ヲ來シタルモノナルカ故ニ資ヲ投シカヲ用フレハ造林セラレサルノ理ナシ

抑本邦ノ地勢タル東北ヨリ斜ニ西南ニ延キ四面環ラスニ海ヲ以テシ氣候溫和地味沃饒加フルニ一帶ノ暖潮海岸ニ沿エテ流レ漏氣充足ニ新火山ノ峰嶺ヲ除クノ外所トシテ樹木ノ成育ニ適セサルノ地ナシ本邦ノ森林繁殖ニ適スルハ風ニ歐米具眼ノ旅者ヲ羨殺スル所ニシテ本邦ノ木材ハ獨佛林學者ノ仰賞シテ措カサル所ナリ夫レ然リ然ラハ此無立木地ニ向テ一定ノ年限ヲ定メ地位氣候ニ適應スル樹種ヲ擇ミ悉ク植栽スルニ至ルヲ期スルヲ要ス果シテ成效ノ日ニ至ラハ實ニ民生百般ノ需用ニ應ズルノ基タルノミナラズ氣候自ラ調和シ水源自ラ充實シ國土保安ノ實舉リ兼

テ國家ノ財源ヲ増スニ至ルハ毫モ疑ヲ容レサル所ナリ、
 第二天然林ノ利用 本邦ノ樹木ヲ以テ覆ハル、森林地ハ多クハ深山幽谷ニ在リテ
 斧斤ヲ加フルノ便ヲ得サル天然林タルヲ如何セシヤ天然林ニアリテハ良樹惡木混
 立雜生スルカ故ニ伐木運材其費用ヲ要スル多ク幾多ノ資本ヲ投シテ之ヲ改良スル
 ニ非レハ完全ナル施業林トナス能ハサルナリ夫レ林業ハ經濟ノ原則ニ從ハサルヘ
 カラス深ク山谷ニ入りテ散在セル樹木ヲ伐採スルヨリハ都市近接ノ絶對的林地ニ
 人造林ヲ設クルヲ可トス然レモ又或ル方法ヲ講スレハ經濟上天然林ニ又利ナキニ
 アラス宜ク速ニ着手スヘキナリ況シヤ是レ本邦目下ノ急務ナルニ於テヨヤ故ニ前
 項ニ述ヘタル如ク絶對的林地ニ造林ヲ施行スルト同時ニ天然林ニハ林道ヲ開キ水
 路ヲ治メ木材運搬ヲ至便ニシ產物利用ノ道ヲ考ヘ林相改良ノ法ヲ講スヘシ實ニ本
 邦ノ富源ヲ開クモノニシテ又利用厚生ノ道ニ合フモノト云フヘシ
 第三施業案ノ編成 無立木地ニ造林ノ天然林ヲ利用スルニハ施業ノ方案ヲ確定シ
 後年ニ至リ敢テ或ハ任意ニ變更スルコトナカラシメテ目的ヲ達スルコトヲ力ムヘシ
 若シ然ラスレテ豫メ一定ノ方案ヲ立テス朝令暮改唯經營者ノ意思ニ因ルトハ何ヲ

以テカ數十年間確一ノ針路ニヨリ均等ノ施業ヲナシ一定ノ年限間ニ目的ヲ達スル
 ヲ得ヘケンヤ古ニ曰ハスヤ凡ソ事前ニ定マレハ則チ困シマズト施業案ノ編成豈ニ
 忽ニスヘケンヤ

第四市町村林及私有林ノ監督 國家ハ管ニ官林ノ經營ノミヲ以テ足レリトスベカ
 ラス宜ク市町村林及ヒ私有林ノ監督ヲナシ官林ト同シク技術アルモノニ經營セシ
 メ以テ其永續ト進歩トヲ圖ルベシ

此他森林法律制定ノ如キ森林試驗場設置ノ如キ或ハ森林測候所創立ノ如キ皆吾人
 ノ眼前ニ横ハリテ其實行ヲ促ス所ナリ

右ハ將來ニ向テ希望スル所ノ大主眼ニシテ實ニ絶大ノ事業ナリ而シテ此等ノ目的
 ヲ達スルニハ必スヤ十分ノ教育ヲ受ケタル林學者ノ力ニ依ラスレハ得テ成功ヲ期
 シ難キナリ論シテ茲ニ至レハ正ニ知ルヘシ林學者ノ需用ハ將來益々大ナルヘキヲ嗚
 呼誰カ森林教育ハ本邦ニ急ナラスト云フヤ

第四章 林學者ノ需用

凡ソ社會ノ事々物々一トシテ需用供給ノ原則ニ從ハサルモノアラス學者豈ニ此圈

外ニ超然タルヲ得ンヤ試ニ我帝國各分科ノ卒業人員ヲ見ヨ就中法科ノ如キハ明治十年ヨリ二十年頃マテハ理科ニモ及ハスレテ僅々十人ニ達セサリシカ二十一年ヨリ急ニ増加スルニ至リタリ又輒近ノ狀況ニヨレハ工科ノ如キハ入學志願者益多ト以テ學者モ亦需給ノ關係ニヨリ消長アルヲ知ルヘシ然リ而シテ我林學者ノ如キ今日ニ在リテハ官途ニ大部分ヲ占ムト雖モ將來ニ於テハ民間ニモ亦大ナル需用アルヲ疑ハス官制ヲ按スルニ森林官ノ定員ハ實ニ左ノ如シ

第一表

官名	林務官	林務官補	營林主事	營林主事補	森林監守	計
人數	二〇	七〇	三八七	六八〇	七二八	一八八五
	四七七					一四〇八

是レ實ニ現時ノ林況現時ノ官制ニ於テ我國官林ニ要スル林吏ノ數ナリトス森林ノ荒敗極マリ立木地ノ面積最小ナル今日ニ於テハ猶然リ若シ事業ヲ擴張シ規模ヲ廣大ニスルニ於テハ更ニ幾倍幾十倍ノ人員ヲ要スルハ論ヲ待タス況ヤ我國ニハ莫大

ノ御料林アリ施業ニ森林家ヲ要スル少ナカラズ此他民林市町村林ノ營林ヲ初トレ木材商社ニ至ルマテ將來林學ヲ知ル輩ノ關スルニ非レバ決シテ完全ノ業務ヲ執ルヲ得ザルナリ是レ少ク眼目ヲ今日社會ノ實勢ニ注クハ何人モ容易ニ之ヲ知了スルヲ得ヘシ今日我國ノ官林銳意整理ヲ業トスル時代猶二千人ノ森林家ヲ要ス而シテ其内ヲ願レバ身真正ノ林業教育ヲ受ケタルモノ幾人カアル實ニ今日森林高等ノ教育又ハ中等ノ教育(農科大學乙)ヲ受ケタルモノニシテ林務ニ従事スルモノ僅ニ左表ノ數ニ過キス

第二表

別種	森林官吏	林學教官	民林業	他業	計
高等	七三 <small>内十六人ハ山林局及御料局在勤</small>	四	一	一	七九
中等	九九 <small>内六人ハ御料局在勤</small>				九九
合計	一七二	四	一	一	一七八

今日ニ在リテハ高等教育ヲ受ケタルモノ僅々七十九人ナルカ故ニ中等教育ヲ受ケ

タルモノヲ採用シテ營林主事トナシ高等教育ヲ受ケタルモノハ林務官林務官補トナセリ即チ第一表上段四百七十七人ノ内眞ノ資格アルモノハ五十七人ニ過キスシテ僅ニ其十二%ナリ之ニ中等教育アル在官者九十三人ヲ合スルモ尙三十一、四%ニ過キス而レテ下等官吏ノ定員ハ第一表下段ノ如ク千四百八人アリト雖モ未タ一人トシテ森林教育ヲ受ケタルモノアラズ

然ルニ現時ニアリテハ本邦森林ノ教育ハ只農科大學本科ト乙科トアルノミ其現在入學者ハ左ノ如キノミ

第三表 入學生表

林學科	林學豫科	林學乙科	計
二四	五	六二	九一

林學者ノ需用ハ前記ノ如ク其レ多數ナルニモ拘ラス其在學者僅ニ此ノ如ク豈ニ將來ノ大需用ニ應スルヲ得ンヤ當局者宜ク深ク察スヘキナリ

試ニ獨逸ニ於ケル林學者需用供給ノ有様ヲ見ヨ今日ニ在リテハ先進ノ學者已ニ好

位世ヲ占有シテ空位ナキニモ拘ラス後進者續々輩出シ數年間無給ノ試補又ハ見習タルヲ甘シテ終生此業ニ從事セントスルニアラスヤ是レ彼邦林政ノ完備シ林業ノ盛大ナルニ由ルト雖モ抑又林學ノ特色トシテ高尙幽雅ノ性質ヲ有シ之カ研究ハ無量ノ趣味アルニ由ラスンハアラザルナリ

第五章 森林教育

夫レ森林ノ教育タル他ノ教育ト異リテ其國山林ノ分配、農耕ノ狀態、地勢ノ關係、木材需用供給ノ摸樣、人民生活ノ程度等ニヨリテ異ナラサルヲ得ヌ或ハ主トシテ學理ヲ講セシムルアリ或ハ專ラ實用ヲ學ハシムルニアリテ林學ハ我占有獨得ノ學術ナリト自稱スル獨逸ニアリテモ各聯邦同一ナラス其同一ナラサル所即チ森林教育ノ特色ナリ而シテ聯邦中普魯西、巴威里、索遜ノ如キハ業林ノ學術技藝一般ニ進歩シ高等專門學校及ヒ大學アリテ高等ノ教育ヲナシ造林學校ヲ設ケテ下等教育ヲ行ヘリ普魯西ニアリテハエーベルスワルテ及ヒミニデンノ二ヶ所ニ專門學校ヲ設ケタリ之ニ入學スルモノハ高等ノ普通教育ヲ受ケ特ニ數學優等ナルヲ要ス最初二ヶ年此學校ニ入り第三年ニ至リ大學ニ入ル

巴威里ニアリテハ始メ二ヶ年間又シヤツフェンブルヒ山林學校ニ於テ教育ヲ受ケ次ニ
 ミュンヘン大學ニ入ル
 索通ニアリテハタラント森林專門學校ヲ置キ高等ノ森林教育ヲ行ヘリ入學者ハ
 高等普通教育ヲ受ケタルモノナルヲ要ス修業年限ハ二ヶ年半ナリ
 其他各聯邦山林學校ノ數ハ枚舉ニ違アラス近時皆其地方ノ分科大學トナサ、ルノ
 議アリテ輿論ハ既ニ業ニ之ヲ認可セリ而レテ現時ト雖モ已ニ五十有八人ノ林學教
 授アリテ無數ノ助手ヲ率非教育ニ從事セリ之ニ從テ學ブ所ノ學生内國人ノミニテ
 五百六十二人千八百八十五年ノ調ニレテ之ヲ獨逸森林面積ニ比スレハ實ニ二萬四
 千七百町步毎ニ學生一人ノ割合ナリ又外國ヨリ留學スル學生百七十五人ナルヲ見
 レハ獨逸國內ニ於テ林學ヲ修ムル學生ハ常ニ七百三十七人ニ下ラザルナリ試ニ之
 ヲ獨逸全國ノ法學生ノ數六千八百二十三人ニ比スレハ一〇、八%ニ當リ醫學生八千七
 百七十一人ニ比スレハ八、五%ニ當ル其他佛、伊、埃、魯、西、瑞、丹、匈、牙、利、瑞、士、等皆高等山
 林學校ヲ置カサルナシ森林ノ最モ少ナキ英國スラ數年前ヨリクローベルス、ヒルニ之
 ヲ設クルニ至レリ

本邦ニ在リテハ森林教育ノ起ル日未タ淺シト雖モ今ヤ大學ノ一科トナリ高等ノ教
 育ヲ布キ之ト同時ニ乙科ナルモノヲ置キテ中等教育ヲ施セリ然レモ前章第三表ニ
 示セシ如ク學生ノ數僅ニ二十四人生徒ノ數亦六十二人ニ過キス今試ニ其學生數ヲ
 法科大學々生ノ四百十一人ニ比スレハ僅カニ二、四%醫科大學々生ノ百四十七人ニ
 比スレハ六、八%ニ當ルニ過キス而レテ下等教育ニ至リテハ更ニ着手セラレサルナ
 リ是レ森林教育上ノ大缺點ナリトイフヘン故ニ今後森林教育ノ計ヲナスニ一方ニ
 ハ益、高等教育ヲ擴張シ一方ニハ下等教育ヲ普及セシメ肝要ナリ然ルニ世人森林教
 育ノ何物タルヲ知ラス動モスレハ概チ林學ハ卑近ノ一學科ナリトイヒ農學ノ一部
 分ナリトイヒ又單ニ伐木利用ノ法ノミニナリトイヒ遂ニ林學ヲ舉テ輕視スルモノア
 リ是レ則チ林學志望者ノ少數ナル所以カ余輩豈ニ一言以テ辯スル所ナクシテ可ナ
 ランヤ
 人或ハ林業ヲ以テ農業ノ一部トナス者アリ是レ大ナル誤謬ナリトス林業ト農業ト
 ハ共ニ殖産事業ニシテ外形相似タルノ觀アレモ其實甚々異ナリ農業ニ在リテハ主
 トシテ穀類菜蔬ヲ栽培スレモ林業ニ在テハ樹木ヲ造植ス是故ニ農業ニ於テハ施肥

ノ法最モ必要ナリト雖モ林業ニ於テハ其要ナシ又農業ニ於テハ收穫產出ノ弊少ナ
 シト雖モ林業ニアリテハ短キモ十數年長キハ百餘年ヲ經テ始メテ收穫アルモノナ
 ルカ故ニ收穫ノ算出豫定頗ル煩雜ニシテ特ニ之カ爲ニ森林數學ナル一科アリ又林
 業ニアリテハ國家ノ保安上ヨリ政治法律上ニ於テ其國ノ林業ヲ規制スルヲ要スル
 カ爲メニ林政學ナル範圍ノ廣キ學科ヲ設ク此ノ如ク林業ノ農業ト大ニ其趣ヲ異ニ
 スルカ故ニ從テ農學ト林業トハ大ニ研究ノ情態ヲ異ニス我農科大學ニ於テハ農學
 科ト並立シテ林學科ヲ設クト雖モ農林二學科ハ直接ノ關係アルモノニアラス獨逸
 大學ニ於テハ林學科ハ或ハ國家經濟學部ト名ケ獨立ノ一分科大學トナスミユンヘ
 ン大學アリ或ハ國家學科中ニ之ヲ設クルモノチュービンゲン大學アリ或ハ理科大
 學中ニ之ヲ設クルギーゼン大學アリテ大學ノ組織及其發達ノ歴史ニヨリテ一ナラ
 ス今林學ヲ構成スル諸學科ヲ舉クレハ實ニ次ノ如キナリ

- 第一 森林生產學
- 一 造林學
- 二 森林保護學

- 三 森林利用學
- 四 林地學
- 五 森林動物學
- 六 森林植物學

第二 森林施業學

- 一 林價算法
- 二 森林較利學 森林收穫學
- 三 測樹學
- 四 森林經理學(一名森林設制學)

第三 林政學

- 一 林政學
- 二 森林管理學
- 三 森林法律學
- 四 森林歴史

生産學中主ナルモノハ造林學及ヒ利用學ニシテ施業學中主ナルモノハ森林經理學ナリ故ニ林學ハ主トシテ造林、利用、經理、林政ノ四大學科ヨリ構成セラル、モノトイフモ敢テ不可ナキナリ而シテ造林及ヒ利用ノ學ハ直ニ他ノ基本學科即チ造林學、林地理學、森林動物植物學ヨリナルト雖モ經理學及ヒ林政學ハ造林及利用學ヲ數學及法律政治學ト結合シテ成立スルモノトス故ニ造林及ヒ利用學ハ全ク他學科ノ應用ニシテ林學中最モ科學的ニ最モ困難ナルモノナリ若シ二學ノ研究充全ナラサレハ經理林政ノ學其用ヲ完クスルヲ得ス

此ノ如ク造林利用ノ學ハ理化諸科學ノ應用ナリ即チ理化諸科學ニ於テ發見シタル學理ヲ藉リテ之ヲ林學上ニ應用シタル者ナリ故ニ純正理科諸化學ニ於テハ專ラ眞理原則ノ發見研究ニ從事シ其應用ニ講及スル少シト雖モ林學ニ在リテハ之ヲ實地ニ應用シ以テ其原理ヲ實ニスル者ナリ凡ソ原理ハ實際ニ應用セラレ始メテ其能アルヲ見ル植物ノ生理、土壤ノ構成之ヲ論究シ盡クセリト雖モ若シ造林學ノ如キ應用學ニ於テ之ヲ實地ニ用フルニアラサレハ社會ニ効ナカルヘク木材ノ構造力ノ作用如何ニ其蘊奧ヲ知ルト雖モ利用學ニ於テ之ヲ應用スルニアラサレハ直接ノ用ヲ見

ス純正學術ノ應用學術ニ於ケルハ眞ニ車ノ兩輪ノ如シトス理化諸科學ハ其原理ヲ探求シテ造林利用學ノ基礎ヲ作り造林利用ノ學ハ理化諸科學ノ原理ヲ取リテ其應用ノ道ヲ講ス是故ニ林學ノ發達ハ理化諸科學ノ發達ニ伴フモノニシテ原理ノ研究ト應用ノ講究トハ自ラ其趣ヲ異ニスト雖モ應用ノ學ヲ講セント欲セハ先ツ其原理ヲ詳ニセサルヘカラス是レ應用學ヲ研究セント欲セハ他學ノ博涉ヲ要シ專門ニ入ルノ初メ高等ノ普通學ヲ要スル所以ナリ而シテ本邦ノ林學ヲ顧ミレハ其情景シテ如何ゾヤ

理化ノ學ハ數多有爲ノ學者アリテ研究ニ怠ラザルガ故ニ今日歐米ニ對シ甚シキ愧色ナシト雖モ林學ニ至リテハ發達遙カニ劣リ未タ旗幟ヲ一方ニ耀スノ學者ニ乏シ見ズヤ國土保安上ニ關スル森林ノ影響供用林ニ關スル施業ノ原則今正ニ研究槽中ニアリテ盛ニ醗酵ヲナスニアラスヤ林業ニ熱心ナル歐米人ハ屢々來リテ本邦ノ森林ヲ觀察シ有用樹種ノ移植ヲ圖レリ爲メニ本邦有用樹種ニシテ今日歐米ニ見ルモノ少カラス又彼ノ世人カ喋々スル本邦ノ雨量及ヒ氣候ヨリ防風、防潮兼テ水源涵養、土砂扞止、洪水防遏ニ及ホス影響ノ多少ヲ知ルハ國家林學上必要ノ問題ナリ而シテ

我國未々之ヲ調査スルノ備ナシ否備ヲナシ得サルニアラス調査ニ從事スルノ人ニ
 乏シキナリ此等ノ影響問題ハ宜ク本邦ニ於テ特別ニ調査セサルヘカラス漫リニ國
 土林相ノ全ク異ナル歐米ニ於ケル研究結果ヲ引キ來リテ高言傲論スルヲ許サ、ル
 ナリ加之本邦造林利用經理ノ業ハ實ニ我固有ニシテ如何ニ歐洲諸國ニ於ケル好果
 ノ研究アリト雖モ唯採テ以テ參考ノ用ニ供スルニ過キス林業ノ根本タル森林樹木
 既ニ我ニ固有ナリ乃チ之ヲ造林ノ之ヲ利用ノ之ヲ經理スルノ法自ラ之ヲ異ニスヘ
 キハ論ヲ俟タス地質氣候ノ情態ニヨリテ樹種ヲ撰定シ播種移植ヨリ以テ枝伐保護
 ニ至ル諸研究ハ造林學者ノ心ヲ勞スル所ニシテ伐木運材ノ方法ヲ講究シ木材ノ性
 質ニ應シテ使用ノ道ヲ定メ之ニ次キ樹皮樹實枯枝綠枝落葉菌草ヨリ土石ノ微ニ至
 ルマテ利用學上ノ研究ハ趣味少シトセス森林已ニ熟スレハ則チ時ト場所トニヨリ
 伐期收穫ヲ規定シ以テ施業ノ道ヲ設ク是レ經理學ニ於ケル數學ノ妙用今日猶研究
 ヲ要スルコト多シ此等林學上ニ關スル諸要件皆研究ノ問題タラサルモノナシ殊ニ
 林學研究ニハ數人ノ協力及ヒ十數年ノ日時ヲ要スルモノアリ彼ノ森林ノ國土保安
 ニ及ボス影響ノ如キ樹木ノ材積生長ヲ測リ一地方ニ通スル材量收額表ヲ製スルカ

如キ森林發育情態ヲ研究スル如キハ一個人ノ力能ク爲シ得ヘキニアラス是故ニ各
 國ノ森林學校ニハ森林試驗所ナルモノヲ設ケ特別ノ費用ヲ與ヘ以テ研究ニ從事セ
 シム獨逸國林業上幾多ノ研究ハ皆此試驗所ノ手ニ成リタルモノナリ

林學ノ他學科ニ比シテ研究ノ困難ナルハ基本學科ノ博涉ニ在リ原理ヲ解セサレハ決
 シテ應用ヲ解シ得サルナリ理化ノ學ニ深カラサルモ動植物學ヲ研究スヘク動植物
 學ニ長セサルモ理化ノ學ヲ講究スルニ難カラス林學ニ在リテハ先ツ基本諸學科ノ
 要項ヲ學ハサルヘカラス況ヤ本邦林學ヲ進步セシメント欲スル林學生ニ於テヤ
 是レ亦歐洲ニ於テ往時諸學科ノ發達セス林業ノ幼稚ナル日ニ當リテハ好テ森林學
 校ヲ設ケ獨立ノ林業教育ヲ行ヒシモ近來基本學科大ニ發達シタルト同時ニ林學科
 ヲ大學内ニ移シ且林學生ヲシテ他學生ト同ク高等中學ノ課程ヲ履マシムルニ至リ
 シ所以ナリ

森林家ノ高等ナル教育ヲ受ケシメサルヘカラスハ林業ノ性質然ラシムルモノア
 リ林業經營ニ當リ僅ニ一事ヲ誤レハ數萬ノ資本百年ノ大計一朝忽チ水泡ニ歸セル
 ムルコト少カラス且其業務ヲ執ル全ク森林家ノ意ニ任スカ故ニ責任ノ大ナルト同時

ニ執勞ノ愉快少カラス是レ森林官吏ノ他官吏ト異ナル所ニシテ一人ノ胸算ヲ以テ十數萬ノ資本ヲ運轉シ雙手ヲ以テ一地方ノ木材ニ於ケル需用供給ヲ左右スルヲ得ルモノナリ故ニ林吏其人ヲ得ルト否トハ實ニ森林ノ利益ニ直接ノ關係ヲ及ボスヘシ一地方ノ森林豈ニ容易ニ無學ノ俗輩ニ其施業ヲ委スヘケンヤ況ヤ林吏其人ヲ得ス一朝施業其法ヲ失フニ於テハ其誤失容易ニ挽回スルヲ得ヘカラサルヲヤ斷崖絶壁ノ地ニ於テ土砂ヲ扞止シ林地ヲ豐饒ニスルモ砂流ヲ漲ラシテ不毛ノ礫地ニ變スルモ唯森林家一己ノ方寸ニアリテ存ス執業ノ周匝緻密ヲ要スル林業ノ如クナルモノ吾人其他ニ類アルヲ見サルナリ

且夫レ社會ノ變動常ナリ經濟ノ道未タ完カラス一時ノ空論勝リ社會ニ制シテ百年ノ大策實業ノ中ニ用非ラレズ而シテ我林業ノ如キ今尙浮遊ノ情態ニアリテ動モスレハ妄說謬論ノ渦中ニ捲キ去ラレントス將來益其猖獗ヲ逞フセムルカ或ハ之ヲ滅絶セムルカ一ニ森林家ノ努力如何ニアリテ存ス學者タルモノ身ヲ以テ之ニ當リ狂瀾ヲ既倒ニ回スノ勇氣ナカルヘカラス林學者ノ任豈ニ重カラヌヤ森林教育ノ事豈急ナラスヤ

明治廿七年五月六日印刷
 明治廿七年五月九日發行

(非賣品)

著作者

東京府北豐島郡瀧ノ川村
 八百六十三番地
 志賀泰山

發行者

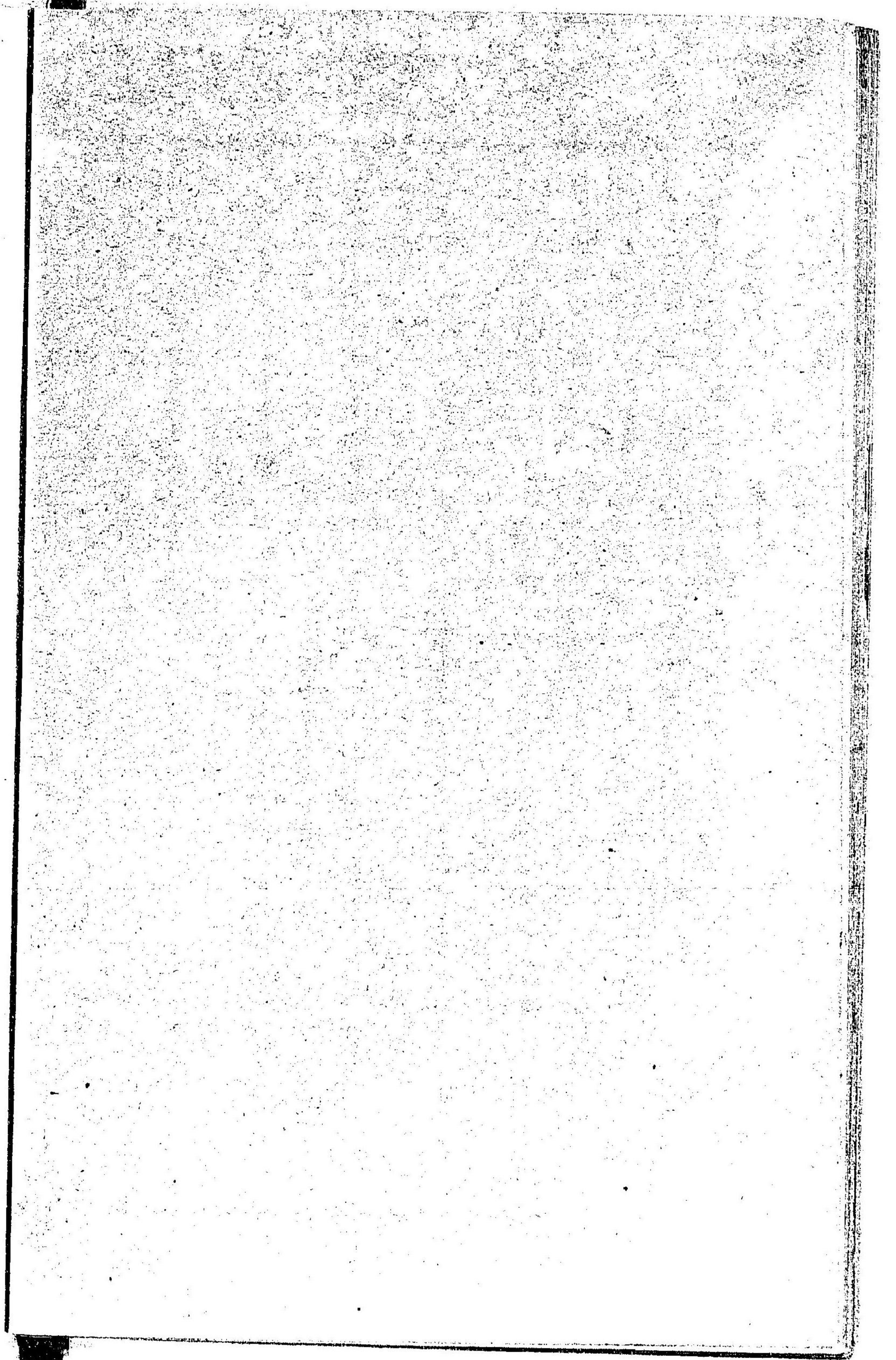
東京市神田區西小川町
 二丁目二番地
 仁科盛行

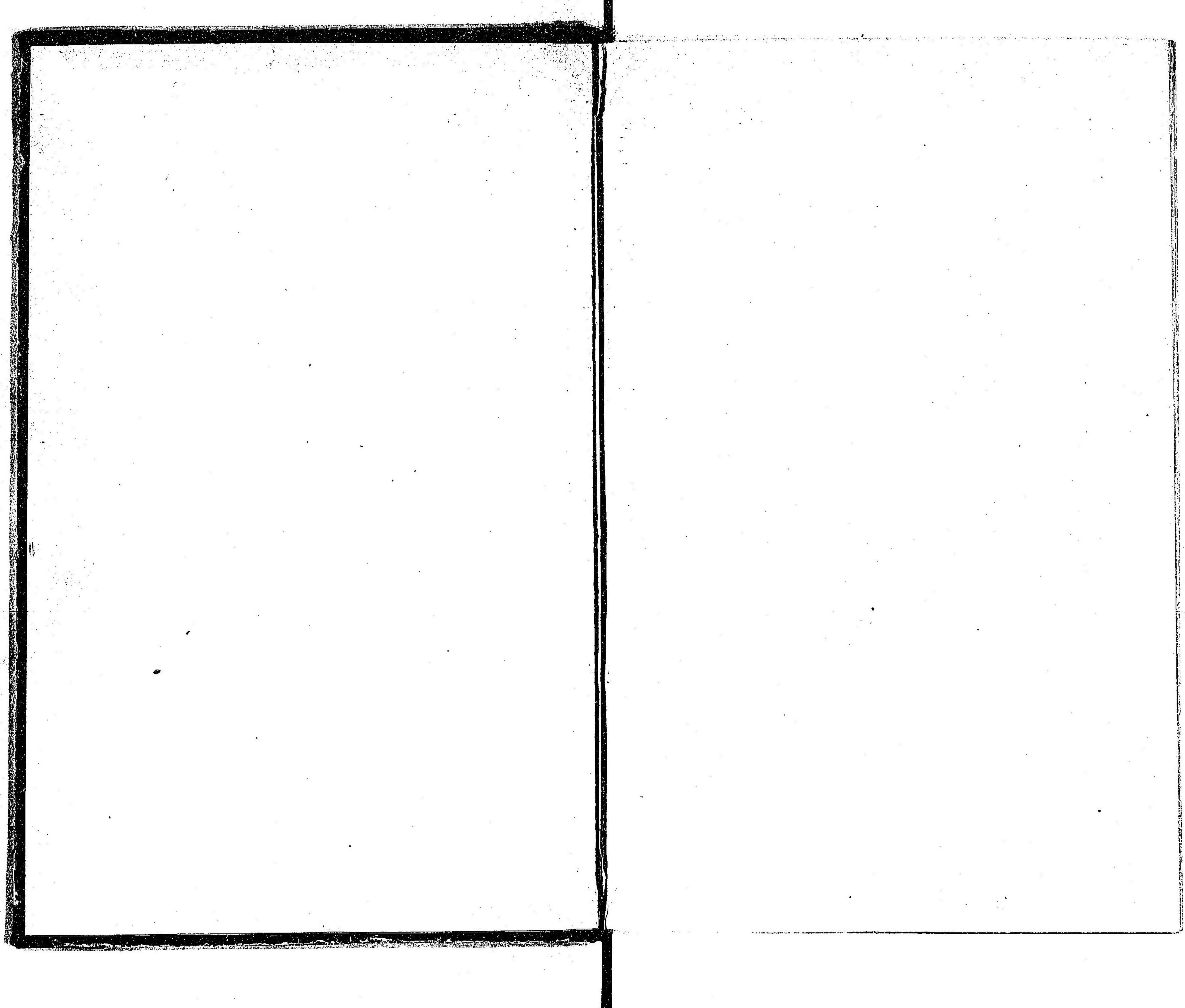
印刷者

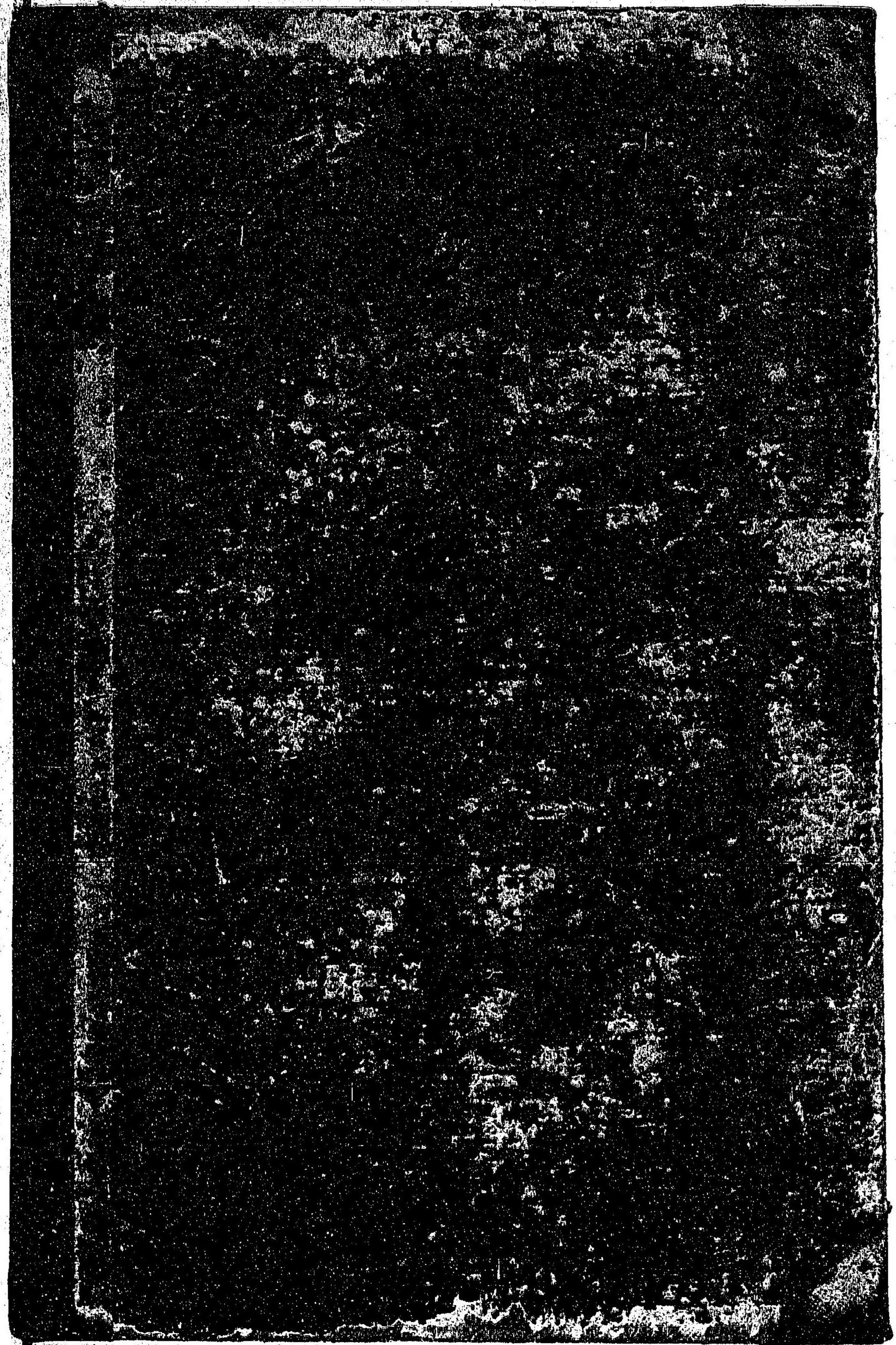
東京市日本橋區兜町二番地
 東京製紙分社
 高橋金四郎

印刷所

東京市日本橋區兜町二番地
 東京製紙分社







本邦ノ森林及ビ林學

065364-000-3

9-258

本邦ノ森林及ビ林學

志賀 泰山/著

M27.5

CCE-0213

